エピソード3　放課後子ども集団 あそばせ隊

遊び場をつくる

遊び場が、足りない

ランドセルを放り出し、空き地や田んぼなど「遊び場」へ飛び込む。そこは、子どもたちだけの世界。遊び場では、誰にも遠慮せず、自分たちだけの力で小さな社会を作っている。

しかし近年では、不審者の情報や安全上の問題などで、子どもたちが過ごす自然な遊び場が失われつつあるようだ。

本年1月に市教育委員会が市内の児童を対象に行った調査では、43％の子どもが放課後を家の中で過ごし、公園や神社などで遊ぶ子どもは9％と少なかった。また、平成19年8月に穂高・三郷・堀金地域で行った調査では、遊び場の確保を望む親たちの声が多く、その理由として「異年齢の子どもとの遊び、集団での遊び、十分な遊び込みをさせたい」が49％、「子どもを外で遊ばせたい」が31％という結果だった。

市では昨年度から、放課後子ども教室「わいわいランド」を全小学校区で実施。下校時間が早い日の放課後、学校の体育館などを利用して、ボランティアスタッフがさまざまな遊びや交流を行う事業を始めた。そして、各地域においても、自主的に子どもたちの遊び場を提供する活動が広がっている。

穂高有明の「あそばせ隊」は、平成16年に発足。市が遊び場所の確保に動き出す以前から、穂高・新屋公民館を拠点に子どもたちを見守っている。

手出し、口出しをしない

10月下旬、午後4時。

公民館には、帰宅途中の子どもたち数十人が自然と集まってきた。追いかけっこ、相撲、おしゃべり、探検ごっこなどをして、自由に飛び回っている。

幅広い年代が入り交じったグループでは、缶けりが始まった。何やら子どもたちは年少者も年長者も楽しめるような遊び方を工夫しているようだ。

引っ込み思案の子には、高学年の女の子が手招きし、仲間の輪に入れようとしている。

男の子4人で始まった相撲では、ルール違反をした子を厳しく律した後、再び全身で絡み合って遊んでいる。

皆、生き生きとした表情だ。

「そう言えば、始めたばかりのころは、『おばちゃん、何をしたらいい』と聞いてくる子もいましたね」。

そう話す安達亜紀子さん（42・穂高有明）は、あそば せ隊の代表者。近隣の主婦3人と会を発足し、現在も運営に携わっている。

実際の活動は、毎週水曜日の午後3時半に始まる。メンバーで都合のつく人が公民館の鍵を開け、徐々に親たちが集まると、お茶を囲みながら、子どもたちの遊ぶ姿を見守っている。

モットーは、手出し、口出しはなるべくしないこと。

宿題をする子、小さな子と遊ぶ子、遊具やボールで遊ぶ子。過ごし方はさまざま。異年齢でも自然な形で触れ合っている。

なるべく手出し、口出しをしないのが基本方針。最初から価値観を打ち出してあるので、親同士が大きなトラブルにつながるようなことはない。

男の子同士で相撲が始まった。土俵がないので、壁に背中をつけた方が負け。ルールは自分たちで決めた。

特集
「場」を求めて